

古代日本人の空間意識構造

山 田 安 彦

地域変遷の構造を把握するには、自然的・経済的・社会的・政治的・軍事的に分析すべきであることはいうまでもないが、この他に宗教的に、あるいは知覚的に追究する必要がある。厳しい自然のなかで人間はそれを克服しながら生活するが、人間の能力では対処しえない自然の驚異的な営力に対して、二律背反的な二面を早くから認識している。それは人間生活を援助し発展させるような利源的な面と、一方では人間に災禍を及ぼすような凶鐘的な面とである。前者に対しては、思慮的な神力として畏敬の念を抱き、後者に対しては破壊的な魔力として恐怖感を持った。人間はそれら両面に対して、絶えず努力を重ねそれに対応する科学的技術と能力を進展させ、自然に対する考え方や認識も変容してきた。このように自然環境に対する理解や認識の内容によって地域形成も微妙に異なってくる。この分析方法を私は一応知覚的歴史地理学の考察と仮称し、主として古代日本を対象にし、実証的に把握しようと、ここ数年、歴史地理学会やその他で愚見を披露し、その学会紀要やその他の誌上に試論を展開してきた。その結果、拙論に対する批評は辛辣である。ある面では賛同していただけるが、侮蔑されるところも少なくない。それは私自身も承知していたので驚きはしない。それでも私は敢えて知覚的歴史地理学の試論を続けたい。今年もまた「歴史地理学紀要」に掲載される筈である。

序言が長くなったが、人間が自然を環境として知覚に空間認識する過程で、自然環境に対する空間的心像が形成され、それが地域形成への行動の過程となると考える。したがって科学的知識や技術が発達していない古代においては、その心像が現実の地域形成に顕著に現われる場合が多い。与えられた紙数が少ないので、舌足らずの感は免れない。

日本の古里ともいふべき、大和盆地の真中に立

てば、東端は三輪山、西端には二上山が座す。両者は大体東西に相對し、しかもいずれもが「天降りつく」御神体山であり、太陽神降臨の聖地である。すなわち太陽神信仰の対象であり、前者は冬至旭日の方位に当り、後者はその夕日の方向の目標じりしとなっている。なお、古代大和の人々は、東の山の東方を神界、西の山の西方を他界と想定する世界像を心像として画いていたようである。換言すれば、西南日本では東西軸＝X軸の方向が空間意識の主軸であったと考えられる。神界の東方に理想郷である「常世の国」が存在すると信じ、東国には沃壤があると想定してそれを求めて東へ東へと西南日本から開発を進展させながら東進したのである。これが東北開発を促す始源的要因となったと考える。

大和から東へ向って伊勢へ、伊勢から東へは海路で黒潮に乗り、伊豆諸島に漂着すれば、北上して伊豆半島、または房総半島に上陸する。一方陸路では東海沿岸を経て東に向い、三浦半島先端の走水から東へ海路で房総半島に渡るようである。房総からは陸路にしても、海路にしても本州の陸地の形状が関東辺りから北に伸びているので、東の沃土を求めて進展するということはどうしても北上することになる。このことからしても房総から北へは空間意識の構造が南北軸＝Y軸を主軸とするようである。房総・常総の式内社（含論社）の元社地が大体南北に鎮座する事例があり、国府の真北に星宮が勧請されている例もあり、また妙見信仰も盛んである。なお、多賀城にしても胆沢城にしても南北に宗教的施設を配置して「遠の朝廷」としての存在を鎮護するという事実も留意すべきであろう。

要するに、日本列島は弧状に長いので、西南日本では空間意識の主軸がX軸であったが、東北日本に向うに従いY軸へと転換し、それがまた立体的にZ軸であるように錯覚するようになる。それ

を物語るかのように、常陸は天に最も近い国であると古代人に信じられ、また常陸では天人の物語が『常陸国風土記』に現われており、今なお3箇所も高天原の伝承地がある。さらに古代日本人の

空間像を要約すると、X・Y・Z軸が混同している場合もあるが、いつも1本の主軸を求めているように思われる。

(千葉大学)

筑波研究学園都市への長距離・長時間通勤

小 野 美代子

1兆数百億円を投じて造られた筑波研究学園都市——首都東京の東北50~60kmの位置に、山の手線内側をすっぽりはめ込めるほどの広さの人工都市——の南からの入口に通産省工業技術院筑波センターが、そしてその一隅に地質調査所——私の職場があります。

1882年(明治15年)創立以来、地質及び地下資源に関する唯一の国立研究機関として存続し、今年で100周年を迎えました。

現在の地質調査所の主要課題は、

1) 国土及び周辺海域の地球科学的実態の解明

2) エネルギー・鉱物資源の探査・評価、

3) 国土の環境保全、自然災害の予知・防止、
で、私の属する海洋地質部は、昭和49年に発足した非常に若い部で、上記3課題のうち、アンダーライン部分を担当しています。この研究分野にあって、研究推進の基盤となる国内外の研究情報の蒐集等に関する業務が、私の携わる仕事の主なものです。

現在学園都市には、文教・理工・生物・建設・共同利用各系の国立研究機関と、特殊法人・公益法人の機関を含め約50の機関が集まっています。これらの機関に働く人々の大半は、家族ともども都市内の宿舎に住み、恵まれた自然環境、職住近接の利点とを生かし、概して快適な生活を送っています。が、残りのかなりの人々は、諸事情で単身赴任あるいは長距離通勤をやむなくさせられています。私もその1人。世田谷のはずれから往復総通勤距離180kmを5時間余りかけて通う毎日です。私は職場では、東京からの女性通勤者は私1人ですが、同じ工業技術院内の他の職場、他省庁の研究所には仲間も沢山いて、常磐線の内車で、

ホームで、階段で、互いにぼやき、慰め励まし合ったりしています。

4:00起床—入浴・冷水摩擦(健康法の一つ)—
4:40出発—新玉川線・山の手線・常磐線・バス—
7:20 職場到着、17:00 庁舎出発—上記を逆に迎って—20:00帰宅。これが私の1日です。

54年11月筑波移転以来、それまでとは180度転換してしまった生活様式を続けて2年、私の得たものは、「人間とは元来コントロール次第でどうにでもなるもの」との感慨です。際限なく墮落していたのが、私の学生時代であったような気がします。豊富な自由時間を自分で管理できず、地理の勉強はそっちのけ、というわけか専門外のものに熱中し、読みたい本、観たいものを追っていた、いわば落第生でした。職場に入ってから2年で結婚、育児と仕事の両立は、私の代役を立派に果たしてくれた健康な母親と夫の協力に支えられて初めて成り立ってきました。2年前の移転時には、下の娘も小学校5年生に成長していたので、病気等への気配りはぐっと減った反面、家を離れている距離・時間の長さ故、要らぬ心労が加わり最初の1年は確かに疲れました。がむしゃらに突進して来た第1段階は終り、今は“5時間”の効率よい使い方を再考する段階に来たところです。

筑波移転は、自分の生き方、考え方を変える確かによいチャンスでした。長距離・長時間通勤という生活形式が精神構造をも変えたといったところでしょうか。転機としては遅すぎたかも知れませんが、これからも自分なりに頑張っていくつもりです。

(4回生 地質調査所)